

## バウム幹先端処理と夢見の頻度

佐渡忠洋<sup>1)</sup> 前田 章<sup>2)</sup> 槇山春香<sup>3)</sup>

1) 常葉大学 健康プロデュース学部 心身マネジメント学科 2) 愛知学院大学 学生相談センター

3) 医療法人愛誠会 昭南病院

## Apical Termination in the Baumtest and Dream Recall Frequency

Tadahiro SADO, Akira MAEDA and Haruka MAKIYAMA

### 要 旨

本研究の目的は、バウムテストの幹先端処理の表現様式と、夢見の頻度（夢想起頻度）との関連を検討することである。調査前の事前仮説は「夢をよく見る者はほとんど見ない者よりも放散型が多い」というものであった。2011～17年の間に大学か専門学校に在籍する930名の学生（平均年齢19.4±1.15歳）に対して、バウムテストと夢見の頻度に関する質問を実施した。得られたバウム画は岸本（2002）の分類法に従って評価し、夢見の頻度は4群に分類した。分析の結果、夢見の4群間で放散型の出現頻度に差はなかった。考察においては仮説が棄却されたことが対象となり、幹上部の表現を理解する困難さが議論された。

**キーワード**：バウムテスト（樹木画テスト）、幹先端処理、夢見の頻度（夢想起頻度）

### Abstract

This research aimed to examine the relationship between the representation of forms of apical termination in the Baumtest and the dream recall frequency. The hypothesis was that the frequency of appearance of radiation type in apical termination would be higher for the group that frequently dreamt than the one that hardly dreamt. The Baumtest and a question on dream recall frequency were administered to 930 students in universities and vocational college (mean age = 19.4 ± 1.15 years) from 2011 to 2017. The collected drawings were rated using the classification by Kishimoto (2002), and the responses on dream recall were categorized into four groups. Results of the analysis showed that there was no difference in the frequency of appearance of the rational type among the four groups of dream recall. Therefore, the hypothesis was rejected and the difficulty in understanding the representation of the upper part of the tree trunk was discussed.

**Keywords** : Baumtest (Tree-Drawing test), apical termination, dream recall frequency

## 1. はじめに

### 1.1 背景と目的

心理臨床学においてイメージが重要なタームであることは論を俟たない。バウムテスト実践で臨床家に示唆に富むイメージを喚起させる視点に、藤岡・吉川 (1971) の幹先端処理がある (佐渡・鈴木, 2014a)。しかし、幹先端処理の先行研究を閲すと、いわゆる開放型に着目する傾きがあり、多くのバウムが該当するいわゆる閉鎖型の意味を探求する試みは少ない (佐渡・鈴木, 2014b)。臨床家・研究者が特異な表現や病理に着目しやすいからであろうか、それとも、山中 (1976) による卓見「メビウスの帯現象」があまりに大きなインパクトをもったためであろうか。ともあれ、幹先端処理研究のさらなる展開には種々の閉鎖型の理解をより深める必要がある。

そこで本研究は、閉鎖型の各類型の理解・探求へ向けた仮説的な糸口を得ることを目的に、岸本 (2002) による幹先端処理の類型と夢を見る頻度 (夢想起頻度) との関連を検討することにした<sup>註1</sup>。ここで夢を扱うのは、第一に、イメージと夢との結びつきが今日まで多く論究がなされているためであり、第二に、筆者らの心理臨床において夢が重要な役割を担っていることが、体験的な考察をここで幾らか可能にすると考えたためである。さらに、夢見の頻度に着目した理由は、集団調査で行う夢の質問はこういった大まかな質問に限られると考えたからである。

### 1.2 仮説

夢見の頻度とパーソナリティとの関連はこれまで数多く議論されてきた (Blagrove, 2007 など)。バウムテストと同じ投映法による研究では、ロールシャッハ法を用いた2つの報告が参考になる。そこでは、夢見の頻度がRとW%とFM+mと正の相関があること (大熊・福岡・竹尾ら, 1970)、夢をよく見る者は内的資質が豊かであること (田中, 1980) が指摘されている。これを参考に幹先端処理を考えた場合、夢をよく見る者はあまり見ない者に比べ、幹を通して下から上へと湧きあがるエネルギーを、幹上部においてコミットメントし、枝分かれさせる方略でおさまりをつけやすいのではないかと、この仮説が浮上した。たとえば、Rは反応産出時のエネルギーの量と持続を、FM+mは内的刺激・資源への敏感さとその活用可能性を示唆しており、そうした特徴を高く有する者であれば、幹上部を筒抜けのまま放っておかないのではないかと (包冠線で覆うとしても)、と考えたためである。

以上より、調査前の筆者らの仮説は、「夢をよく見る者はあまり見ない者に比して放散型が多い」というものであった。なお、本研究ではバウムテストで描かれた木をバウムと呼ぶ。

## 2. 方法

### 2.1 対象

調査対象者は、これまで筆者らが携わった研究においてバウムテストを実施し、かつ夢見の頻度も訊ねた東海地区・九州地区の大学生・専門学校生、計930名 (平均年齢  $19.5 \pm 1.15$  歳) である。内訳は、男性272名 (平均年齢  $19.7 \pm 1.12$  歳)、女性658名 (平均年齢  $19.4 \pm 1.15$  歳) である。

対象者の年代を限定し、評定の均一性を確保するために、26歳以上の者、および2本以上のバウムを描いた者のデータはすでに除外してある<sup>註2</sup>。

### 2.2 調査手続き

2011~17年に、対象者らから調査協力への同意を得た上で、集団法 (869名) および個別法 (61名) で調査を行った。バウムテストはA4判画用紙と4B鉛筆を渡し、「実のなる木を描いてください」との指示で実施した。その後、アンケート用紙を配付し、「最近、夢を見ることはどれくらいありますか？」に対して、「1週間に3日以上 (夢高群)」「1週間に1日程度 (夢中群)」「2週間に1日程度 (夢低群)」「まったくみない (夢無群)」の中から、もっとも当てはまるものを1つ選択する設問を使って、夢見の頻度を尋ねた。

夢見の頻度に関しては、先行研究においても、その調査法に多くの課題が指摘されている (Schredl, 2007)。ただし、夢をよく見る人とほとんど見ない人 (特に夢高夢と夢無群) とを何らかの形で区別するには、この設問で十分だと判断した (佐渡・西尾・磯村ら, 2014; 佐渡・西尾・堀田ら 2015)。

### 2.3 数量化と分析

幹先端処理の分類法は岸本 (2002) の基準に従った。また、用紙からはみ出しは幹先端処理の分類に影響を与えるため、Koch (1957/2010) の「上縁はみ出し」に加え、バウムのどの形態部が用紙上縁からはみ出したかで判断する「幹はみ出し」「枝はみ出し」「樹冠はみ出し」の3つの下位項目 (佐渡・岸本・山中, 2014) も検討指標に加えた (これら下位項目は重複可である)。全バウムは3名の臨床心理士が個別に評定した。その後、3名の評価結果を照らし合わせ、2名以上の評価が一致したものを最終評価とし、3名すべての評価が一致しなかった場合は評定者らの協議によって決定した。

分析に際しては、夢見の頻度4群における各類型の人数と頻度を導き出した後、Fisher's exact testを用いて、放散型の人数を夢見の4群間で比較した。本研究では  $p < .05$  を有意差ありと判断した。

表 1 分析結果と出現頻度の一覧

	夢高群 n = 384	夢中群 n = 339	夢低群 n = 141	夢無群 n = 66	p 値	計 n = 930
開放型	34 ( 9)	21 ( 6)	8 ( 6)	1 ( 2)	n.s.	64 ( 7)
完全開放型	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	—	0 (—)
閉鎖不全型	0 (—)	0 (—)	1 ( 1)	0 (—)	n.s.	1 ( 0)
先端漏洩型	2 ( 1)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	n.s.	2 ( 0)
冠漏洩型	32 ( 8)	21 ( 6)	7 ( 5)	1 ( 2)	n.s.	61 ( 7)
閉鎖型	316 (82)	288 (85)	122 (87)	60 (91)	n.s.	786 (85)
冠型	220 (57)	204 (60)	77 (55)	34 (52)	n.s.	535 (58)
放散型	87 (23)	79 (23)	42 (30)	21 (32)	n.s.	229 (25)
基本型	6 ( 2)	3 ( 1)	3 ( 2)	5 ( 8)	= .012	17 ( 2)
その他の閉鎖型	3 ( 1)	2 ( 1)	0 (—)	0 (—)	n.s.	5 ( 1)
その他	34 ( 9)	31 ( 9)	11 ( 8)	5 ( 8)	n.s.	81 ( 9)
上縁はみ出し	53 (14)	60 (18)	20 (14)	6 ( 9)	n.s.	139 (15)
幹はみ出し	7 ( 2)	2 ( 1)	2 ( 1)	0 (—)	n.s.	11 ( 1)
枝はみ出し	5 ( 1)	7 ( 2)	1 ( 1)	0 (—)	n.s.	13 ( 1)
樹冠はみ出し	50 (13)	59 (17)	20 (14)	6 ( 9)	n.s.	135 (15)

単位=人数 (%)

### 3. 結果と考察

#### 3.1 結果

放散型の人数を夢見の4群間で比較した結果、有意差は認められず、仮説は支持されなかった(表1)。

また試みとして、全類型(と指標)の出現度数を4群間すべてで、先と同じ方法で検討したところ、基本型でのみ差が認められた(表1)。そこで、残差分析として基本型の人数を、2群間の比較をその対の数だけ Fisher's exact test を用いて検討した結果、夢高群と夢無群、および夢中群と夢無群との間で差が認められた(図1)。

以下、仮説が棄却された点に絞って考察を進めたい。

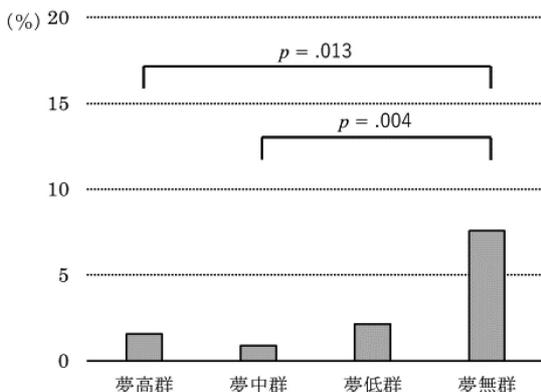


図 1 基本型の残差分析

#### 3.2 先行研究からみた放散型

まず、放散型の結果を理解するために、先行研究を参考に。そこで、岸本の幹先端処理分類法を用いた先行研究の結果を、筆者らが把握している限りにおいて表2にまとめた(先行研究の数はメタ的検討を行う上で十分とはいえないが、参考にはなる)<sup>註3</sup>。

非臨床群の場合、大学生のデータでは、いずれの研究でも放散型の出現頻度は30%程度で、本研究における夢見の4群のそれらと概ね同じであった。ただし、新田の研究は冠漏洩型が多くて放散型が少ないため、メタ的理解からは除外しておくことにしたい。そして「体感認識」と「空想内省」の程度で放散型に差はないことが分かっている。中学生のデータでは、この約半世紀前で放散型の出現頻度が10%強ほど低下していることが分かり、現代の中学生の頻度は20%程度である。臨床群において放散型の頻度がやや少なく見えるのは、大項目の閉鎖型に分類されるバウムが相対的に少ないためかもしれないが、研究数が少なく、これについても何とも言い難い。そして、特定群(臨床群と非臨床群のどちらにも分類しがたい群を本研究ではこう呼ぶことにした)のアスリートでは放散型の出現頻度は25~30%程度であり、劇団員では46%との報告もあれば30%との報告もある。

以上より、放散型は時代の影響を受ける可能性があり、非臨床群の大学生の場合は25~30%を一応の目安とできる。そして、放散型と関連する描き手の心理的特徴は、現在まで特定されていない。さらに可能性として、臨床群では頻度が低く、劇団員では頻度が高いといえるの

表 2 先行研究の整理結果 (単位=%)

研究	非臨床群												臨床群					特定群																
	佐渡ら (2001)	佐渡ら (2004)	岸本 (2002)	児玉 (2009)	佐渡ら (2002)	佐渡ら (2001)	新田 (2001)	松山下 (2002)	空想内省不全小	空想内省不全大	体感認識不全小	体感認識不全大	岸本 (2002)	岸本 (2002)	岸本 (2002)	中島ら (2004)	松浦ら (2008)	岸本ら (2002)	中島ら (2005)															
対象者数 (名)	345	334	398	188	72	80	101	185	24	13	148	85	60	198	99	105	40	65	137	72	65	75	62	146	111	35	58	29	15	14	166	98	39	144
群および属性	1967年の中学1年	1967年の中学2年	1967年の中学3年	1967年の中学1年	1967年の中学2年	1967年の中学3年	高校生	高校生	IC継続	IC消失	ICなし	医学生	大学生	大学生	大学生	大学生	溶解体験あり	溶解体験なし	大学生	体感認識不全大	体感認識不全小	空想内省不全大	空想内省不全小	心療内科患者	60歳未満	60歳以上	糖尿病患者	幹の離接あり	幹の離接なし	幹の離接修正	アスリート	アスリート	劇団員	劇団員
開放型	14	16	17	15	11	8	4	8	29	0	5	16	25	11	6	41	48	37	8	10	6	11	5	40	34	63	43	80	34	21	44	41	5	8
完全開放型	2	0	1	2	1	1	3	-	-	-	-	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	17	16	20	-	-	-	-	0	1	0	0
閉鎖不全型	3	2	3	0	1	1	0	-	-	-	-	2	0	1	0	2	0	3	2	1	3	4	0	6	5	11	-	-	-	-	5	1	0	1
先端漏洩型	5	10	10	2	0	1	0	-	-	-	-	2	5	1	0	5	8	3	0	0	0	0	0	11	5	31	-	-	-	-	18	0	0	2
冠漏洩型	3	4	3	12	8	4	1	-	-	-	-	9	20	9	6	34	40	31	5	7	3	5	5	6	8	0	-	-	-	-	21	39	5	6
閉鎖型	59	58	60	74	85	85	93	92	71	100	95	76	62	79	94	58	53	62	77	72	82	77	76	51	60	20	57	20	66	79	47	57	87	68
冠型	5	5	3	59	57	61	51	-	-	-	-	39	25	52	57	40	40	40	42	43	42	40	45	31	38	9	-	-	-	-	14	21	31	32
放散型	28	33	34	13	22	20	26	-	-	-	-	27	22	26	28	7	5	8	30	25	35	35	24	12	13	6	-	-	-	-	27	26	46	30
基本型	21	12	19	2	4	1	1	-	-	-	-	8	13	2	3	10	5	14	3	4	2	3	3	5	5	6	-	-	-	-	1	10	5	3
その他の閉鎖型	7	7	4	1	1	3	15	-	-	-	-	2	2	0	0	1	3	0	1	0	3	0	3	3	5	0	-	-	-	-	5	0	5	3
その他	27	26	23	10	4	8	3	-	-	-	-	7	13	10	6	1	0	2	15	18	12	12	19	9	6	17	-	-	-	-	9	2	8	24

※セル内の「-」について：データが無いが、頻度が算出できなかったことこの意。

※非臨床群について：佐渡ら (2014) では岸本による中学1~3年の結果も記しているが、データ数が少ないためここには記さなかった。山口 (2006) は「高校2年生」を対象に調査しており、それを「空想の友達 (IC)」を現在も有しているか、無くなくなったか、そもそも有していたか、順に「IC継続」「IC消失」「ICなし」の3群に分けている。新田 (2011) は「大学生」を対象に調査しており、「溶解 (自分が溶ける)」「体験 (自分が溶ける)」「溶解体験あり」「溶解体験なし」の2群に分けている。松山下 (2012) は、「大学生」を対象に調査しており、「自己の体感や感情を認識し、それを言語化するプロセスの体感や自らの感情の認識や表現が不全しているか」の程度で、「体感認識不全小」と「体感認識不全大」に分けており、さらに同一対象者を、「自分の感情を内省的に分析し、空想や想像を行うプロセスの不全」と「空想内省不全大」と「空想内省不全小」にも分けている (松山下の報告の語句は若干変更した)。

※臨床群について：岸本 (2002) は「心療内科患者」を対象に調査しており、年齢により「60歳未満」と「60歳以上」に分けている。風景構成法とバウムスタットの幹先端処理を比較したデータはここに記していない。大倉ら (2011) は「糖尿病患者」を対象に調査しており、得られたバウムスタットの「本来なら1本の線で描かれるべき『幹』が途中で途切れ、そのつづきを接ぎ足したかのような表現」である「幹の離接」の有無および修正の有無より、「幹の離接あり」「幹の離接なし」「幹の離接修正」に分けている。なお、大倉らの報告は、他の報告 (大倉ら, 2011b) と同じ出現頻度を示していることから、同一データを解析したと考え、一編のみを取り上げている。

みである。したがってこれまで、放散型の意味は十分探求できてはいない。そして、本研究で着目した夢見の頻度もまた、従来のアプローチ法と同じく、放散型の頻度に影響を与えるほどの要因にはならなかったと推察される。

### 3.3 夢見と境界

先に触れたように、夢見の頻度というものが、バウム形態あるいはバウム描画体験を区別するほどの要因でないとしても、われわれの仮説にどのような誤りがあったかを考えておくことは、幹先端処理の理解に益するだろう。

本研究ではバウムと夢見との関連を、いわば境界の観点から検討した。夢と境界との関連については、夢研究の大家 Ernest Hartmann の業績が参考になる。Hartmann (2011, pp. 36-39) は、夢の関わる先行研究をレビューし、また彼自身が開発した『境界尺度 The Boundary Questionnaire』(Hartmann, 1989) を用いた経験から、心的境界の中でも「希薄な境界 thin boundaries」を色濃く有する者が夢を見やすいことを見出している。一方、バウムテストでは当初から、幹先端処理が(心的)境界との関連で理解されることが多かった(山中, 1976 など)。そして、臨床群では非臨床群に比べて閉鎖型のバウムが多いという結果も、「境界」の視点から議論されてきた(岸本, 2002)。

このことから、本研究において、バウムの幹先端処理を描き手の境界の特徴を捉える観点と考へ、その様式と夢見との関連で議論したこと自体に、大きな誤りはなかったといえるだろう。ただし、心的境界を単一的に捉え、境界の「諸特徴」の中の希薄さに着目しなかった点が、筆者らの仮説の不十分さであったと考えられる。児玉(2013)は『境界尺度』の日本語版を作成し、そこに7つの因子を同定している。そしてバウムの幹先端処理との関連を検討した結果、幹先端処理の開放型の者は閉鎖型の者に比べ、「境界の脆さ」因子のみが高いことを見出している(児玉, 2009)。この知見は幹先端処理の開放型に着目したもので、放散型を含む閉鎖型の意味に着目してはいない。それでも、幹先端処理が境界の「希薄さ」を反映するのか「脆さ」を反映するのかといったより詳細な仮説生成が、本研究の冒頭には必要であったと考えられる。

### 3.4 幹上部について

これを踏まえた上で、放散型の意味を改めて考えたい。放散型、すなわち、幹上部を幹から枝へと分化させて幹の内空間を閉じ、幹先端処理という課題を乗り越える表現様式は、他の類型以上に描画にエネルギーを要する(岸本, 2002)。幹上部に拘れば拘るほどバウムは詳細でリアルなものになるが、それは同時に、ある種の葛藤に身を置き続けることでもある。今回の検討で、夢高群と夢無群——夢をよく見る者たち vs. ほとんど見ない者たち、あるいは、夢を見たことをよく覚えていること vs.

ほとんど覚えていないこと——との間で放散型の出現頻度には差はなかった。この結果を改めて考えると、後付けの形にはなるが、首肯できる部分がある。

たとえば、Jung (1984/2001-02, I, p.24) が言うように、「夢は客観的事実であり、私たちの期待に応じて表れるものではなく、私たちが作り出したものでも」なく、「意識に対して独自の自律性を示す」と考えるならば、夢は個を超えた所からやって来ると理解することもできる。したがって、本研究で筆者らは、「幹の中を下から上へと昇るエネルギー」を思い描き、放散型における枝分かれを自我に近いレベルの表現と解したために、夢が生まれるところでの非個人的なものを考慮できていなかった、といえる。幹内を流れるエネルギーという観点は、臨床実践からしても有意義な視点であるが、これを夢との関連で考える時、個人的なものと同個人的なものを混同してしまう可能性があるのだろう。

とはいえ、Freud (1900/2012, pp.24-52) は夢の源泉には4つのもの——外部からの感覚の興奮、内部からの感覚の興奮、内部からの肉体的刺激、純粋な心的刺激源——があるとす。その内、少なくとも3つは明らかに夢見手個人に夢の源泉があると理解できるため、個人的なものから生じる夢という考えをわれわれは軽視するわけにはいかない。本研究で用いた夢見の設問からでは、夢の質やその個人的意義、さらに夢の源泉を思い描くことができないため、これ以上の踏み込んだ議論を行うことはできないが、こうして幹上部の表現を考えると、「幹の中を下から上へと昇るエネルギー」という視点が、実に多義的・多層的な意味を持つと理解できる。

幹上部の描画を理解すること、あるいは何らかの調査データからその意味を探求することは困難であるかもしれない。それでも、幹上部において描き手が何を体験し、その体験において描き手の何が紙面に投げ放たれたのかを今後も考え続けることは、幹先端処理研究において不可避の課題であろう。いみじくも、これを本研究は明確化したといえる。

### 3.5 男女での検討

当初の目的にはなかったが、男性と女性のデータをそれぞれ検討しておく。事前仮説をもたない統計処理ではあるものの、提示する数値は今後の研究の参考となると考えたためである。男女それぞれで類型と指標のすべてを、第2節で記した方法と同じ手続きで分析した。

分析結果を表3と表4に示した。そして、男性において夢見の4群で有意差が認められた放散型の残差分析結果を図2に、女性において夢見の4群で有意差が認められた基本型の残差分析結果を図3に表した。

男性の結果を見ると、筆者らの仮説とは反対に、放散型は夢無群に多かった。女性の夢無群で多い様式は、基本型であった。本結果をこれ以上考察しないが、これは幹先端処理と夢見において性差が重要な要因となること

表3 男性の結果

	夢高群 <i>n</i> = 105	夢中群 <i>n</i> = 103	夢低群 <i>n</i> = 40	夢無群 <i>n</i> = 24	<i>p</i> 値	計 <i>n</i> = 272
<b>開放型</b>	18 (17)	8 (8)	3 (8)	1 (4)	<i>n.s.</i>	30 (11)
完全開放型	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	—	0 (—)
閉鎖不全型	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	—	0 (—)
先端漏洩型	1 (1)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	1 (0)
冠漏洩型	17 (16)	8 (8)	3 (8)	1 (4)	<i>n.s.</i>	29 (11)
<b>閉鎖型</b>	78 (74)	84 (82)	32 (80)	21 (88)	<i>n.s.</i>	215 (79)
冠型	61 (58)	66 (64)	22 (55)	10 (42)	<i>n.s.</i>	159 (58)
放散型	12 (11)	15 (15)	9 (23)	9 (38)	= .012	45 (17)
基本型	4 (4)	1 (1)	1 (3)	2 (8)	<i>n.s.</i>	8 (3)
その他の閉鎖型	1 (1)	2 (2)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	3 (1)
<b>その他</b>	9 (9)	11 (11)	5 (13)	2 (8)	<i>n.s.</i>	27 (10)
<b>上縁はみ出し</b>	14 (13)	15 (15)	8 (20)	2 (8)	<i>n.s.</i>	39 (14)
幹はみ出し	2 (2)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	2 (1)
枝はみ出し	2 (2)	2 (2)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	4 (1)
樹冠はみ出し	12 (11)	14 (14)	8 (20)	2 (8)	<i>n.s.</i>	36 (13)

単位=人数 (%)

表4 女性の結果

	夢高群 <i>n</i> = 279	夢中群 <i>n</i> = 236	夢低群 <i>n</i> = 101	夢無群 <i>n</i> = 42	<i>p</i> 値	計 <i>n</i> = 658
<b>開放型</b>	16 (6)	13 (6)	5 (5)	0 (—)	<i>n.s.</i>	34 (5)
完全開放型	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	—	0 (—)
閉鎖不全型	0 (—)	0 (—)	1 (1)	0 (—)	<i>n.s.</i>	1 (0)
先端漏洩型	1 (0)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	1 (0)
冠漏洩型	15 (5)	13 (6)	4 (4)	0 (—)	<i>n.s.</i>	32 (5)
<b>閉鎖型</b>	238 (85)	204 (86)	90 (89)	39 (93)	<i>n.s.</i>	571 (87)
冠型	159 (57)	138 (58)	55 (54)	24 (57)	<i>n.s.</i>	376 (57)
放散型	75 (27)	64 (27)	33 (33)	12 (29)	<i>n.s.</i>	184 (28)
基本型	2 (1)	2 (1)	2 (2)	3 (7)	= .026	9 (1)
その他の閉鎖型	2 (1)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	<i>n.s.</i>	2 (0)
<b>その他</b>	25 (9)	20 (8)	6 (6)	3 (7)	<i>n.s.</i>	54 (8)
<b>上縁はみ出し</b>	39 (14)	45 (19)	12 (12)	4 (10)	<i>n.s.</i>	100 (15)
幹はみ出し	5 (2)	2 (1)	2 (2)	0 (—)	<i>n.s.</i>	9 (1)
枝はみ出し	3 (1)	5 (2)	1 (1)	0 (—)	<i>n.s.</i>	9 (1)
樹冠はみ出し	50 (13)	59 (17)	20 (14)	6 (9)	<i>n.s.</i>	135 (15)

単位=人数 (%)

を示唆していよう。

#### 4. おわりに

本研究では、「夢をよく見る者は幹先端処理の放散型を描きやすい」との仮説を調査データから検討したが、

その仮説は退けられた。探索的な試みとはいえ、この研究は筆者らにとっては、幹上部の描画を考える難しさを一層感じた取り組みであった。

いわゆるネガティブ・データを使った本稿は、説得力に欠けるだけでなく、筆者らの仮説生成の拙さを露呈しているだろう。諸々の批判は甘受せねばならないが、提示

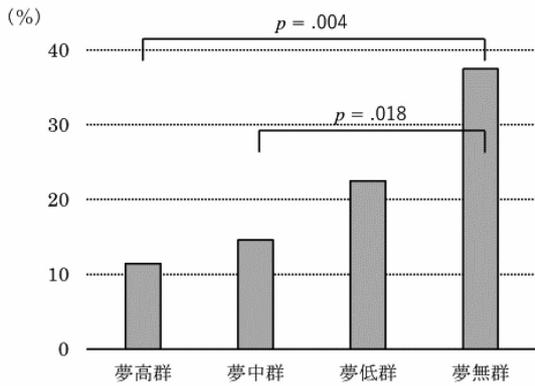


図2 男性の放散型の残差分析

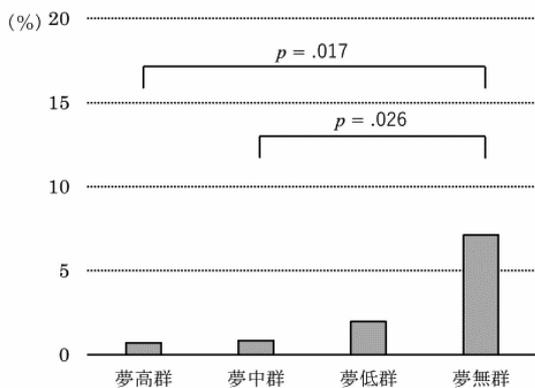


図3 女性の基本型の残差分析

した中規模の数量的データと幹先端処理の仮説生成例は、今後のバウムテスト研究の参考になるのではと思います、この形で報告することとした。

註

1. プライオリティという点で、本研究はある研修会における岸本寛史氏の講演(岸本, 2009)に影響を受けて実施したことを明記しておきたい。氏の知見はその後、学会で発表されている(Kishimoto, 2013)。
2. 本研究は槇山・前田・佐渡(2014)に、新たな調査データを加えて検討したものである。
3. 本稿の引用文献とは別に、検討対象となった報告の一覧をここに記す。

岸本寛史(2002). バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, 20(1), 1-11.

岸本寛史・中島登代子(2012). 役者の心は開かれている? —バウムテストにおける幹先端処理に着目して. 臨床心理身体運動学研究, 14(1), 19-28.

児玉恵美(2009). 「バウムの幹先端処理に示される境界的側面の研究—日本版境界尺度との関連から. 九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要, 8, 27-32.

松下優衣・石田弓(2012). アレキシサイミア傾向と身体の捉え方との関連. 広島大学心理学研究, 12, 179-196.

松浦さほ・鈴木壯(2008). スポーツ競技者のバウムに関する基礎的研究—幹先端処理について. 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学), 56(2), 159-166.

中島郁子・佐渡忠洋・古谷学(2015). 劇団員のバウム表現について. 日本心理臨床学会第34回秋季大会発表論文集, p.569.

中島登代子・長岡由紀子・蔵原建彦(2014). スポーツ競技場面の特異性に関する研究(1)—バウムの幹先端処理を通して. 臨床スポーツ心理学研究, 1, 41-50.

新田侑実(2011). 溶解の体験とバウムにみる自我境界の在り方. 京都学園大学 人間文化学部学生論文集, 9, 66-77.

大倉朱美子・岡本三希子・山中康裕(2011a). 当院糖尿病治療教育入院患者におけるバウムの一つの特徴—「幹の離脱(Intermittent Trunk)への着眼. 心理臨床学研究, 28(6), 799-804.

大倉朱美子・岡本三希子・岡本元純・山中康裕(2011b). 糖尿病治療教育入院患者に出現したバウムテストの指標「幹の離脱」の臨床的意義. 心身医学, 51(10), 902-909.

佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親(2009). バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究—大学生のバウム画より. 心理臨床学研究, 27(1), 95-100.

佐渡忠洋・鈴木壯・田中生雅・山本眞由美(2012). バウムの描画プロセスに関する研究—バウムはどこから描かれ、幹はどのように構成されるのか. 臨床心理身体運動学研究, 15(1), 59-68.

佐渡忠洋・岸本寛史・山中康裕(2014). 今昔の中学生のバウムテスト表現の検討—1960年代と2010年代との発達指標を通して. 明治安田こころの健康財団 研究助成論文集, 49, 77-86.

山口智(2006). 想像上の仲間に関する研究—二つの発現開始時期とバウムテストに見られる特徴. 心理臨床学研究, 24(2), 189-200.

文献

Blagrove, M. Dreaming and Personality. In; D, Barrett & P. McNamara (eds.), *The New Science of Dreaming*, Vol.2. Westport: Prager Publishers, pp.115-158. 2007.

Freud, S. *Traumdeutung*. Leipzig und Wien: Franz Deuticke. 1990. 金関猛訳『夢判断 <初版> (上・下)』中央公論新社. 2012年

Hartmann, E. Boundaries of Dreams, Boundaries of Dreamers: Thin and Thick Boundaries as a New Personality Measure. *Psychiatric Journal of the University of Ottawa*, 14, 557-600. 1989.

Hartmann, E. *Boundaries: A new way to look at the world*. Summerland, CA: CIRCC Ever Press. 2011.

- 藤岡喜愛・吉川公雄「人類学的に見た、バウムによるイメージの表現」『季刊人類学』2巻3号, 3-28頁, 1971年
- Jung, C.G. *Dream Analysis Notes of the Seminar given in 1928-1930 by C. G. Jung*, edited by W. McGuire. Princeton: Princeton University Press. 1984. 入江良平・細井直子訳『夢分析 I & II』人文書院. 2001-02年
- Kishimoto, N. Boundary in the Tree Test and dream recall. 30th Annual Conference of the International Association for the Study of Dreams. 22. Jun. VA, US. 2013.
- 岸本寛史「バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群」『心理臨床学研究』20巻1号, 1-11頁, 2002年
- 岸本寛史「バウムテストにおける指標の意味」日本臨床心理身体運動学会第4回資格認定講習会, 奈良. 3月21日, 2009年
- Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3.Auflage. Bern: Hans Huber. 1957. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男『バウムテスト [第3版] ——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房, 2010年
- 児玉恵美「バウムの幹先端処理に示される境界的側面の研究——日本版境界尺度との関連から」『九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要』8号, 27-32頁, 2009年
- 児玉恵美「日本版境界尺度 (JBQ) の作成および精神病理・創造性との関連の検討」『応用障害心理学研究』12号, 1-11頁, 2013年
- 槇山春香・前田章・佐渡忠洋「夢見の頻度とバウムテストの幹先端処理との関連」『日本心理臨床学会第33回大会発表論文集』p.359, 2014年
- 大熊輝雄・福岡悦夫・竹尾生氣・各南讓・本池光雄・三代宏子「夢とロールシャッハ反応」『ロールシャッハ研究』XII, 69-80頁, 1970年
- 佐渡忠洋・岸本寛史・山中康裕「今昔の中学生のバウムテスト表現の検討——1960年代と2010年代との発達指標を通して」『明治安田こころの健康財団 研究助成論文集』49号, 77-86頁, 2014年
- 佐渡忠洋・西尾彰泰・磯村有希・加納亜紀・宮地幸雄・高井郁恵・松永美紀・邦千富・堀田容子・山本眞由美「大学生の夢見に関する基礎研究——夢見頻度と質問紙との関連」『CAMPUS HEALTH』51巻1号, 572-574頁, 2014年
- 佐渡忠洋・鈴木壯「バウムテストの幹先端処理について I——原則と諸問題」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』62巻2号, 217-228頁, 2014a年
- 佐渡忠洋・鈴木壯「バウムテストの幹先端処理について II——提唱以後の研究動向」『岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)』62巻2号, 229-242頁, 2014b年
- 佐渡忠洋・西尾彰泰・堀田亮・磯村有希・加納亜紀・高井郁恵・邦千富・堀田容子・山口美紀・山本眞由美「大学生の夢見に関する調査研究 (第二報)——夢見頻度と生活習慣との関連」『CAMPUS HEALTH』52巻1号, 338-340頁, 2015年.
- Schredl, M. Dream Recall. In; D, Barrett & P. McNamara (eds.), *The New Science of Dreaming*, Vol.2. Westport: Prager Publishers, pp.79-114. 2007.
- 田中千穂子「自我機能からみた夢想起 (dream recall) に関する研究」『ロールシャッハ研究』XXII, 71-89頁, 1980年
- 山中康裕「精神分裂病におけるバウム・テストの研究」『心理測定ジャーナル』12巻4号, 18-23頁, 1976年  
(2017.9.11 受稿, 2017.9.12 受理)